

イタリア学会
第61回大会 プログラム

2013年10月19日(土)

富山大学
(五福キャンパス)

会場 富山大学 五福キャンパス
人間発達科学部第1棟4階141講義室

◆ 研究発表Ⅰ 10:30～12:00

10:30～11:00

1. 音楽劇の上演責任者に関する一考察 ～デ・ソンミ、インジェニエーリ、コ
ラーゴ～
萩原里香（東京芸術大学） 司会：中川さつき（京都産業大学）

11:00～11:30

2. 未来派「航空美学」と飛行する身体
横田さやか（東京外国語大学） 司会：小林満（京都産業大学）

11:30～12:00

3. ゲラルド・マローネとナポリの前衛
土肥秀行（静岡文化芸術大学） 司会：高田和文（静岡文化芸術大学）

◆ 休憩 12:00～13:30

◆ 総会 13:30～14:45

◆ 研究発表Ⅱ 15:00～17:00

15:00～15:30

4. ベネデット・クローチェの文芸批評に関する一考察 ～連載「19世紀後半
のイタリア文学についての覚書」（1903 - 1914）におけるカルドゥッチ論
を中心に～
國司航佑（京都大学） 司会：倉科岳志（京都産業大学）

15:30～16:00

5. マンゾーニ『いいなづけ』における反文学と反歴史
霜田洋祐（京都大学） 司会：堤康德（翻訳家）

16:00～16:30

6. 現代共通イタリア語のアクセントとリズム
津田悠一郎（東京大学） 司会：鈴木信五（東京音楽大学）

16:30～17:00

7. 「カテコン——神学と政治の闘」
岡田温司（京都大学） 司会：大黒俊二（大阪市立大学）

◆ 懇親会 18:00～20:00

会場：連山 岩くら

富山市牛島町18-7 アーバンプレイス 14F

（富山駅北口より約徒歩5分）

会費を事前にお振込みいただく必要がありますのでご注意ください。

音楽劇の上演責任者に関する一考察 ～デ・ソンミ、インジェニエーリ、コラーゴ～

萩原 里香（東京芸術大学）

16世紀後期より17世紀初期にかけて、北イタリア各地の宮廷で行われた祝典では、音楽を取り入れた演劇的催しが盛んであった。こうした祝典での舞台上演の責任者であった人物を「コラーゴ corago」と呼ぶことはあまり知られていない。1630年頃に著された不明著者による『コラーゴよき舞台を作るための考察-』が1983年に編集出版され、その名称と存在が知られるようになったが、音楽史上で浸透しているとは言い難い。舞台上演責任者の仕事の一端が分かる著書は、これ以前にもふたつ存在し、ひとつはレオーネ・デ・ソンミの『上演芸術に関する四つの対話』（1556/65年）、もうひとつはアンジェロ・インジェニエーリの『劇詩について及び寓話を上演する方法』（1598年）である。

デ・ソンミの『四つの対話』は、作者の分身と思われる劇上演の達人であるヴェリーディコという人物が、宮廷に勤務する2人の人物、サンティーノとマッシミアノに演劇論を語る形式で進められる。第一の対話では、喜劇の起源と規則について、第二の対話では、幕の分割について、第三の対話では、演技の規則と衣装について、第四の対話では、舞台装置とインテルメディオについて語られる。インジェニエーリの『劇詩について及び寓話劇を上演する方法』は、1598年8月にチェーザレ・デステに献呈された著書であり、2部に分かれている。第1部の『劇詩について』では、制作における諸注意、そして第2部の『寓話を上演する方法』では、自身がコラーゴを務めた『僭主オイディプス』（1585年3月3日、カルネヴァーレの最終日曜日にヴィチエンツァのテアトロ・オリンピコで上演された）での例を挙げながら、実践に関する注意事項が述べられている。不明著者による『コラーゴ』は全23章からなるが、この著書はコラーゴの役割のすべてと言える仕事が網羅されている。各章の内容を簡単にまとめると、第1章：コラーゴの定義、第2～5章：機能的な劇のテキストを制作するための忠告、また、遠近法的な舞台や舞台空間の構築、第6章：表現する3つの方法：散文で演技すること、音楽の中で演技すること、無言（パントマイム）で演技すること、第7～14章：上演される音楽とテキストの問題、第15～16章：音楽に合わせて表現

する方法、もしくは簡潔に表現する方法について、第17～22章：演劇的な上演についてのいくつかの特別な要素（合唱、バツロ、衣装、仮面、装置、照明）について、第23章：公演が始まる前に注意されるべき、コラーゴに向けての一般的ないくつかの忠告、という構成になっている。まさにコラーゴのために書かれた言わばマニュアルのようなものであり、これら3つの書物の中でも最重要文献であることは疑いない。

発表者の研究意図は、この上演責任者であるコラーゴが、貴族から依頼を受けてから、どのように芸術家たち（詩人、作曲家、建築家、画家、衣装デザイナー、照明技師等）とコンタクトと取りながら本番を迎えたか、理論書と実例をもとにその活動を明らかにすることである。本発表ではとりわけ、注文主より依頼を受けてから作品が完成するまでの音楽劇のあらゆる要素について、コラーゴが行うべき仕事を順を追って検証していく。まずは題材の選択について、どのような戯曲を選ぶべきか、次に、なによりも関係が密でなければならない台本作家とコラーゴの協力関係、そして、どのような台本が求められたのか検証する。その後、台本を上手く援助することが求められる音楽について、キャスティングの方法、最後に、舞台装飾（舞台装置、遠近法、照明、衣装）について検証する。これらに焦点を当て、上記3つの理論書から読み取れる規則を考察する。

未来派「航空美学」と飛行する身体

横田 さやか（東京外国語大学）

序

本発表では、前衛芸術運動未来派（未来主義）の「航空美学」について考察する。論考は、速度の美学に則しそれ自身も変容を余儀なくされる「未来派的身体」とその進化についての考察を中心に展開される。本発表を通して、未来派美学が、地上のダイナミズムから空中のダイナミズムへと飛翔する行程とその芸術的意義について明らかにすることを試みる。

「航空美学」考察

「航空美学」とは、飛行を主題とした芸術表現である。飛行そのものや飛行機の美、そして飛行する身体や飛行中の感覚、感情が作品のテーマになる。とくに1930年代に隆盛し、詩、絵画、彫刻、演劇、ダンス等さまざまな芸術分野において展開された。「飛行神話」は未来派創立宣言（1909年）を皮切りにその後の未来派作品のなかに度々垣間見ることができる。滑空する機体を讃え、プロペラやモーター音といった飛行の要素を舞台に持ち込むといったアイデアを作品化する過程を経て、およそ20年をかけ、飛行する身体の抽象化された芸術表現「航空美学」へ帰着したといえる。

飛行する身体

「航空美学」考察の鍵となるのは、身体性の介入である。身体の進化とその可能性にかける未来派の理想的な人間像は、マリネッティの突出した身体感覚こそが想像の源になる。数々の宣言文に見られるように、人間の駆ける速度を超越した速さに同調しようとする欲求は、かれ自身が知覚する変化と変容の表象なのだ。航空技術の発展に伴い、人は重力という足かせから解放される。マリネッティの極言通り、人は羽をつけ空を飛ぶことを実現したのだ。飛行すること、それは、もはや19世紀的な気球の昇降運動による空中飛行ではなく、ダイナミズムと速さがアクロバティックに競演する、まさに未来派の理想であった。いっそう重要なことは、航空技術の進歩により、この時代に飛行機による飛行体験が可能になっ

たことである。当時、マリネッティをはじめ男女を問わず、こぞってアクロバット飛行を体験していた。未来派が掲げる「速さ」の美は、アクロバット飛行の実現により、地上を滑走する速さから、空中を駆け、舞う速さへと進化する。身体と機械の融合という新しい人間の理想像は、飛行する人間として具体化し、地面からの解放は、過去からの断絶をも意味していた。

「航空絵画」にみられる二潮流

アクロバット飛行体験は、飛行する機械という媒体を介しての、身体の空との融合を実現する。身体感覚が、空気、光、雲、風、といった要素の集合する空間に溶け合う。同時に、地上を鳥瞰し、パースペクティブの固定された視座から解放され新たな視点を獲得することでもある。すなわち、一方では、精神的な融合であり、感覚的な「増大した身体」の実現である。他方では、新たな世界描写の獲得であるといえる。航空絵画のふたつの潮流は、ここに起因する。ひとつは、精神的、より抽象的な絵画の潮流であり、もうひとつは、神聖な領域に到達しえた人間が目にする風景の、叙述的描写の潮流である。画家の身体が飛行することで初めて、対象を知覚し、地上に降りたのちにそれを再現することが実験されていたのだ。画家である以上に、パフォーマーとして自らの身体を作品制作に巻き込むこの傾向は、「航空ダンス」にみられる飛行の表象とともに説明がなされる。バレリーナ、ジャンニーナ・チェンシがダンスによって表現した主題は、飛行機の模倣であると同時に、飛行士が空中で体感する感情表現であった。未来派の「航空美学」にみられる身体表象の変容は、速度美学の地上の速さから空中の超身体的速さへの発展そのものであり、速さの結果としての、身体の抽象化と動きの純化によってより洗練された芸術表現へと到達しているといえる。

ゲラルド・マローネとナポリの前衛

土肥 秀行（静岡文化芸術大学）

誕生から一世紀の節目における未来派再考の試みの多くで、マリネッティら第一世代が核となる従来の同心円的な未来派のイメージが、地理と時代に幅のある“futurismi”といった複数性を示すものに変化している。さらに伊国内、南部のローカルな分派が新たに注目されるようになった。特にナポリについては、地域の未来派に関心が集まるにつれ、1910年代半ば以降活発化する、ポストヴォーチェ派の前衛へと研究対象が広がっていった。

当時のナポリの文人サークルで中心的な役割を果たしたのがゲラルド・マローネ（1891-1962）である。本発表では、まず導入として、文学史に記録されるマローネの伝記事項を紹介する。筆頭に挙げられるのはウンガレッティを処女詩集『埋もれた港』（1916）へとむかわせた交流、そして下位春吉と共同で行った同時代歌人の先駆的な翻訳である。次に本題に入り、マローネ編集 La Diana（1915-17）と、前衛に与した他の雑誌例との文脈化を試みる。La Diana は、先行する全国区の La voce（プレッツォリーニ編集期）と Lacerba の流れを継ぎ、地元でいち早く未来派を紹介していた Vela latina（1913-18、方言詩人ルツソ編集、未来派詩人カンジュッロ連載）と、日本語詩を扱っていた Eco della cultura（1914-17、カンジュッロや詩人フィウーミも参加）を意識しつつ、参戦へと緊張の高まる 1914 年末から翌年にかけて創刊された（マローネ = La Diana は参戦派）。マリネッティやカラーの接近と寄稿、La Diana 同人フィウーミがとりもつパピーニやゴヴォーニとの交友が雑誌に華を添える。さらにはアポリネール、ツァラ、ヤン・アルプといった欧州レベルの前衛芸術家までもが La Diana に注目し、マローネと書簡を交わす。ただ、戦中の混迷期、なんらかの明確な方向性が雑誌にあったわけではない。マローネと La Diana については、ダントゥオーノとダンプロージョによる複数の先行研究があり、本発表では「(La Diana は) あえて折衷的で穏健な立場をとり、様々な文学傾向に開かれていた」(D'Ambrosio 1999: 143) との指摘の妥当性を検証していく。

最後に、マローネによる「脱前衛」のプロセスも追っておかなければならない。1920年代に入ってマローネは、専らイデオロギー的な理由で前衛から離れる。

むしろ、もともと La Diana のサークルはクローチェとのつながりが強く、特に雑誌が定期刊行されなくなって久しい戦後期、敬愛の念はますます表面化する。雑誌廃刊後も残る叢書 Libreria della Diana から発表された、マローネの代表作となる文学評論集『ドゥルシネアの守り』（1920）の頃には、詩作を中断し、クローチェを本格的な批評の対象とする。同年、同叢書刊のアンソロジー『ベネデット・クローチェ』では、著名執筆陣にマローネも名を連ねる。マッテオッティ事件後、マローネが立ち上げた政治評論誌 Il saggatore（1924-25、ガリレオの反駁の書『贗金鑑識官』に倣う）は、やはりクローチェに近いアメンドラの熱心な参加をみる。が、当局による雑誌押収が続き短命に終わる。その後、ローカル化の進む未来派ナポリ版を代表する文芸誌 Vesuvio（1928-29）に関わるも主体性に欠ける。弁護士としての活動が制限されていく 1920年代から、生地ブエノス・アイレスへ亡命に近い移住を果たす 1930年代初頭までを政治的に最も活発に過ごしたが、第二次大戦終結は彼地で迎える。

以上、本発表をもって、ナポリとローマにわかれる「マローネ文庫」の資料をもとに、ゲラルド・マローネの日本における初の本格的な紹介の場、そしてローカルな未来派とナポリの初期前衛の意義について考察する場としたい。

ベネデット・クローチェの文芸批評に関する一考察
～連載「19世紀後半のイタリア文学についての覚書」(1903-1914)
におけるカルドゥッチ論をめぐって～

國司 航佑 (京都大学)

ベネデット・クローチェ (1866 - 1952) は、20世紀のイタリアを代表する思想家として名高い人物であるが、その名を学問の世界に知らしめた作品としては、なにより1902年に出版された『表現の学および一般言語学としての美学』が重要である。だが、その思想がイタリアの知識人一般の認知するところとなったのは、クローチェの主催する学術誌「Critica」が流布し、そこに掲載された彼の文芸批評が多く読者を獲得したからであった。

「Critica」誌が創刊されたのは1903年だが、それから1914年までの間、クローチェは *Note sulla letteratura italiana nella seconda metà del secolo XIX* (「19世紀後半のイタリア文学についての覚書」) という標題のもと、一連の文芸批評を同誌上に発表している。この連載においては、まずカルドゥッチが論評の対象となり、その後フォガツァーロ、ヴェルガ、ディ・ジャーコモ、ダンヌンツィオなど、当代屈指の作家が次々と組上に載せられていった。これらの評論はその後、クローチェ自らの手により4巻立の書物にまとめられ、1914年および1915年に、*Letteratura della nuova Italia* (『新イタリアの文学』) として刊行されることになる。

連載「19世紀後半のイタリア文学についての覚書」に関して、発表者が特に注目するのはカルドゥッチに関する論考である。理由は主に次の3点である。①カルドゥッチは、クローチェが生涯敬愛し続けた詩人であった。②1903年に「Critica」誌創刊号の巻頭を飾る評論として発表されたカルドゥッチ論は、『新イタリアの文学』に収録されない。③同じ連載の一環として、1910年に新たなカルドゥッチ論が発表される。そしてこちらは、『新イタリアの文学』に収録されることになる。

クローチェの批評家・編集者としての一般的な傾向に鑑みたとき、同一の連載中に同じ作家を二度取り上げることも、連載記事を書籍にまとめる際に一つの評論だけ外してしまうことも、実は極めて不自然なことである。つまり、クローチェがカルドゥッチ文学を論じ直したことについては、背景になんらかの特殊な事情

があったのではないかと考えられるのである。

そこで着目すべきは、1910年のカルドゥッチ論の執筆の前に生じた、この問題と関連付けるべきいくつかの出来事である。1907年2月には、カルドゥッチがこの世を去っていた。1907年から1909年の間には、クローチェ美学の深化を跡付ける著作が、相次いで執筆・刊行されている (*Filosofia della pratica* 『実践の哲学』、*L'intuizione pura e il carattere lirico dell'arte* 「純粹直観と芸術の叙情的性格」等)。以上を踏まえた上で、本発表では、この時期のクローチェの文芸批評に関して一考を加えたい。その際、このテーマに関する重要な既存の研究も参照しながら議論を進めることとする。

なお、クローチェの文芸批評の日本語訳は、現在、ほとんど存在していない。こうした事情を考慮し、発表者は以下のホームページ上に何本かの評論の抄訳を掲載する予定である。クローチェのテクストを直に読みたい方は、是非これを参考にされたい。

京都大学文学研究科イタリア文学研究室ホームページ Italomania

URL: <http://www.kyoto.zaq.jp/italomania/studi.html>

マンゾーニ『いいなづけ』における反文学と反歴史

霜田 洋祐 (京都大学)

アレッサンドロ・マンゾーニ (1785-1873) の歴史小説 *I promessi sposi* (『いいなづけ』、初版 1825-27, 決定版 1840-42) は、従来の歴史叙述、現実描写のあり方とは異なる方法を探りながら、1630 年頃のミラノ地方の社会の全体像を描き出そうとした作品である。

古典主義の文学体系においては、「様式分化」がとりわけ厳格に守られ、ひとつの規範となっていた。王侯貴族・英雄を主要登場人物とし荘重体を用いる悲劇(および叙事詩)、上流市民階級を描く中庸体の社会喜劇、そして大衆庶民を低俗な文体で描く喜劇というように、主題・文体・ジャンルのヒエラルヒーが規定されていたのである。近代小説は、こうした体制を覆した革新的ジャンルとされるが、*I promessi sposi* においては、規範に対する違反が徹底していると言える。この作品には、聖俗貴賤を問わず様々な身分の人物が登場するため、文体・様式はおのずから混交することとなる。しかも、社会的地位の低い田舎の男女レンツォとルチーアが主人公に選ばれ、その物語が滑稽なものではなく深刻なドラマとして語られる一方で、悲劇の主人公たる王侯貴族・権力者のほうは、とかく否定的に描写され、ときに喜劇のレベルに貶められるのである。

ところで *I promessi sposi* において日常・現実的な世界へと引きずり下ろされることになる悲劇や叙事詩の主人公たちは、本来、歴史(大文字の歴史)においても主役となるべき地位の者たちである。19 世紀以降の歴史学の発展とともに状況は変化して行くこととなるが、古典的な歴史叙述においては、王侯貴族・英雄たちの関わる大きな事件こそが語るに値するものとして記述対象となっていたのである。それに対し、小説というジャンルは、普通の人々の生活を描くべき主題として獲得していったのであるが、マンゾーニの歴史小説は、それをフィクションではない領域にまで押し進める。*I promessi sposi* において対象となる歴史的事実の多くは、「歴史を為す」人々の視点から眺められるのではなく、下層の人々(サバルタン)にも関わるものとして、彼らの視点から描かれるのである。実際、レンツォら架空の登場人物たちが観察者となっている場合は言うまでもないが、彼らが一切登場しないいわゆる「歴史叙述的」章においても、諸事件は既存の歴史

叙述とは異なる立場から記述される。これによって「大文字の歴史」は異化され、それまでの歴史が切り捨ててきた欠落部分が補われることにもなるのである。

物語の主人公を社会階層の下位から選び出して、彼らの物語にあらゆる階層の人々を関わらせてゆく中で、規範に反して様式を混交する。古典主義文学(大文字の文学)に対するこのような態度【反文学】は、「大文字の歴史」とは異なる視点に立って為政者たちを「現実」のレベルに引き落としつつ歴史に翻弄される全ての人々を描こうとする姿勢【反歴史】と、密接に関連している。ここに見出されるのは、これまでにない表現形式によって社会の全容を描き出すというプランであるが、それこそが *I promessi sposi* のフィクションと歴史の叙述——それぞれ独特のレトリックを有し区別が可能な二つの部分——を有機的に結びつけている一つの鍵であると発表者は考える。

本発表では、通常の階層区分に対する例外者および例外状況、つまり聖職者の介入と大災害による混乱というテーマを取り上げる。これらを重要な手掛かりとして、「反文学」および「反歴史」の要素が、登場人物の選択に始まり、筋の展開、さらには表現のレベルに至るまで浸透していることを明らかにしていきたい。

現代共通イタリア語のアクセントとリズム

津田 悠一郎 (東京大学)

概要

現代共通イタリア語（以下イタリア語と表記）のアクセントは必ずしも予測可能ではなく語彙的に定められていると言えるが、それでも数の上では最後から二番目の音節に置かれる場合（*parola piana*）が圧倒的に多いため、何らかのアクセント規則が働いていると考えられる。本発表は、イタリア語の韻脚のパラメータをモーラ式トロカイオスと設定することで、このアクセント位置の分布の偏りについて説明を試みる。また、最終音節を重音節化する現象の *raddoppiamento sintattico* に注目し、その作用を上記のパラメータに組み込むことによって、従来の研究では例外として排除されていた最終音節にアクセントがある語（*parola tronca*）にも韻脚の枠組みを適用できるようにする。この結果、イタリア語が持つ全てのアクセントのパターンに対して一貫した記述が可能となり、さらにイタリア語の最小語が2モーラであるということも明示される。

音節の重さとアクセントの関係

Krämer (2009) が指摘しているように、イタリア語のアクセントは重音節と密接な関係にある。その最大の現れは、軽い開音節にアクセントが置かれた場合、母音が長化して¹重音節となるという事実にある。これは *penult* において顕著であり、*antepenult*、*preantepenult* と遠ざかるに従い長化は若干弱まっていく。VV のライムは、*penult* にあっても長化が弱く、VC に至ってはどの位置でも長母音化が一切起こらない。これは両者が元から重音節であるからだと思わせる。そして *final* に限っては、軽い開音節であっても母音に変化することは決してない。

¹ イタリア語では母音の長短の区別が失われているため、ここでいう長母音というのはあくまで音声上のものである。

raddoppiamento sintattico による音節構造の変化

raddoppiamento sintattico (*raddoppiamento fonosintattico*、以下 RS と表記) は共時的で生産的な二重子音化現象であり、音節構造においては最終音節の重音節化現象として働く。つまり RS は、アクセントのある開音節が重音節になるという0節で述べた規則を、*final* で実現することに寄与している。

$$(1) (C_1) VC\# + C_2V \rightarrow (C_1) VC_2\# C_2V$$

Krämer (2009) などの先行研究では RS が実現したときのみ語末のモーラが指定され、そこに脚が形成されると分析されてきた。しかしながら本発表は (1) の通り、RS を伴う語の末尾には常に C スロットおよび1モーラがあると考えられる。この分析を支持する事実として、それらの語が、語末に子音を持つ借用語と同様に性・数による母音の変化を決して起こさないことが挙げられる。

脚とリズム構造

イタリア語はストレスアクセントを持つので、ストレス論における韻脚を考えることができる。本発表はイタリア語の脚のパラメータを次のように設定することで、イタリア語に *parola piano* が多い理由を説明する。

(2) 脚の種類：右からモーラ式トロカイオス

終端規則：右

韻律外性：なし

不完全脚：なし

parola tronca の語についても、RS に基づく語末子音を想定すればこの脚の構造が問題なく当てはめられ、他の語と同様にアクセントを予測できる。またこれによって開音節の一音節語も一貫して処理できるようになり、ここからイタリア語の最小語が2モーラであることが導かれる。

引用文献

Krämer, Martin. *The Phonology of Italian*. New York: Oxford University Press, 2009.

「カテコン——神学と政治の闘」

岡田 温司（京都大学）

使徒パウロがその書簡の一つ（『テサロニケの信徒への手紙Ⅱ』2: 3-8）において一度だけ言及した概念「カテコン」（抑えるもの）は、初期キリスト教時代に様々な解釈を呼んできたが、その後はほとんど忘れ去られていた。パウロによると、終末にメシアが再臨するよりも前にまず「不法の者（アノモス）」が現われるのだが、その出現はしばし「カテコン」によって抑止されている、という。テルトゥリアヌスやアウグスティヌス以来、この「カテコン」は、ローマ帝国とも、あるいはまた逆にローマ教会とも解釈されてきた。すなわち古くからすでに、神学と政治、聖と俗、信仰と権力のあいだの闘において機能する概念装置だったのである。

この謎めいた両義的な概念を現代に甦らせたのは、ドイツの政治哲学者カール・シュミットであったが、「カテコン」を巡って近年とりわけ活発な議論が沸き起こっているのは、ほかでもなくイタリアの哲学界である。マッシモ・カッチャーリ、ジョルジョ・アガンベン、ロベルト・エスポジトといった、現代イタリア哲学を代表する論客たちがこぞってこの「カテコン」に言及し、独自の解釈を提示しているのである。

パウロのメシア思想を現代に読み解いた『残りの時』（2000年）において、アガンベンは、それまでの「カテコン」解釈を完全に転倒してみせる。管見によれば、その議論の要点は二つある。第一に、「カテコン」が帝国と教会のどちらを指そうとも、いずれにしても法的に構成された権力であることに変わりはない、という点。次に、アガンベンの読みにおいて、「アノモス」つまり法の「無為」——不活性化——こそが肯定的な状態であり、メシア的な時間の本質である、という点。それゆえ、「抑えるもの」としての「カテコン」は、必然的に救済を遅らせている否定的な存在とみなされることになる。この主張は、最新著『悪の神秘——ベネディクトゥス 16 世と時間の終焉』（2013年）においても繰り返される。

一方、ナポリの政治哲学者エスポジトが「カテコン」にはじめて言及したのは、『イムニタス——生の保護と否定』（2002年）においてである。「免疫」という医学生理学的な用語を生政治（バイオポリティカ）の土俵へと連れだしたこの先駆的

な著書において、エスポジトは、「カテコン」を一種の「自己免疫化」としてとらえることを提唱する。つまり、「悪をみずからの内に含み、保持し、養う」ことで悪に対処する、というホメオパチー的機能である。それはまた「否定的なもの」の肯定的なもの」とも言い換えられる。が、生体を破壊に導く過度の自己免疫化の危険性を

「カテコン」も免れているわけではない。最新著『二者——政治神学機械と思考の位置』（2013年）では、宗教そのものが西洋において、肯定と否定、拡張と禁止の免疫的な装置として機能してきたことが論じられている。

上述の二人よりも、ずっと早くから「カテコン」に注目していたのは、『始まりについて』（1990年）のカッチャーリである。時間のテーマを哲学的かつ神学的に辿ったこの著書において彼は、比較的長い考察をパウロの「カテコン」に捧げていたのだ。「カテコンはすぐれて形成的な原理である」、この一文に彼の解釈は要約される。「保持された背教と信仰の証言との（不可能な）共生」を示すこの歓待の働きを、教会は尊重しなければならない。アガンベンともエスポジトとも異なって、最新著『抑える力』（2013年）でもまた「カテコン」の積極的意味が探られている。

歴史的に見てイタリアが世俗権力と教会権力の葛藤の中に晒されてきたこと、さらに神学の「世俗化」と近代の政治思想とが密接な関連を持つことを念頭に置くなら、「カテコン」がこの国において有する意義は極めて大きい。本発表が試みるのは、神学と政治哲学との闘に出没する、彼らの「カテコン」解釈を検討することで、その現代的な意味を炙り出すことである。

大会会場

富山大学 五福キャンパス 人間発達科学部第1棟 4階 141 講義室
〒930-0887 富山県富山市五福 3190

控室

人間発達科学部第1棟 4階 142 講義室

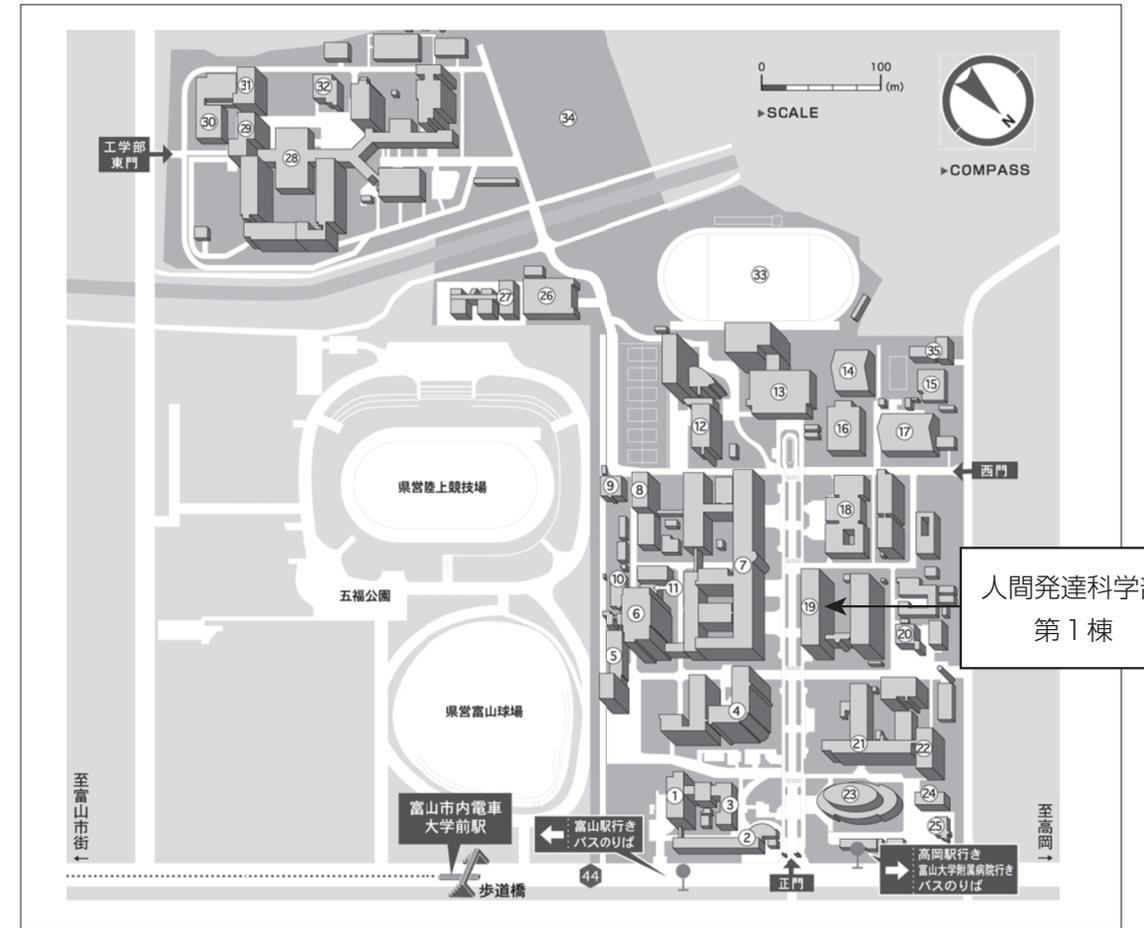
アクセス

- ・市内電車：「富山駅前」駅から富山地鉄2系統「大学前」行に乗車約10分、終点「大学前」駅下車徒歩2分（10～15分間隔で運行しています）
 - ・バス：JR富山駅前 富山地鉄・路線バス「富山大学経由」（3番のりば）乗車約10分、「富山大学前」バス停下車すぐ（30～60分の間隔があります）
 - ・タクシー：JR富山駅から約10分 富山空港から約20分
- ※ 市内電車は必ず「大学前」行にお乗り下さい。また市内電車(料金200円)・バス(料金230円)共に料金後払いです。支払い時に自動的に釣銭が出ませんので、小銭のご用意のない場合は車内の両替機をご利用下さい。

▶ 富山駅バス、タクシー、市内電車のりば（富山駅正面口）



キャンパス



懇親会のご案内

日時：大会当日 18時00分から 20時00分まで

会場：連山 岩くら（JR富山駅北口より約徒歩5分）

富山市牛島町 18-7 アーバンプレイス 14F Tel: 076-444-5252

会費：¥6,000-（学生 ¥3,000-）

同封の用紙で10月9日（水）までにお払い込みください。

お払込後のキャンセルはご遠慮ください。

※お支払いいただいた懇親会費に若干の剰余金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記します。

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部 イタリア語学イタリア文学研究室内

Tel. & Fax: (075)753-2774

E-mail: studiit@bun.kyoto-u.ac.jp

URL: <http://studiit.jp/>